



日刊建設通信新聞社 代表取締役社長  
CNCP 個人正会員 和田 恵

JR線の有人最南端駅に山川駅がある。鹿児島県薩摩半島を走るJR指宿枕崎線の半島東端にある駅だ。そこから西方に大山駅、西大山駅と続き、さらに15駅目が終点で最西端の枕崎駅となる。ちなみに、大山駅は筆者の生まれ在り所・大山集落にあり、隣駅の西大山駅は無人を含むJR全駅の最南端に位置、秀麗「薩摩富士」の愛称を持つ日本百名山のひとつ、開聞岳を望む立地と相まって、「JR日本最南端の駅」の案内標識と開聞岳を背景に写真撮影する観光スポットとなっている。

前置きはともかく、ことしのNHK大河ドラマは明治の偉人・西郷隆盛の生涯を描く「西郷(せご)どん」だが、その西郷翁にゆかりの社(やしろ)が大山集落にある。土地の方言で「うやま・じんじゃ」と呼ぶ大山神社である。その大山神社は西郷と従兄弟で、わが国初の元帥で陸軍大将・大山巖の祖である「大山氏」を祀る、いわゆる大山家の氏神である。老朽化もあり一昨年の台風16号で被害を受け、約100年ぶりに社殿が改築された。この大山神社、明治150年にちなむ本稿の題材に相応しいと思い、紹介することにした。

大山集落は薩摩半島の南端にある、世帯数約400戸、人口1000人弱の限界集落への転落が懸念される村である。筆者が子どもの時分は南薩地域の要衝に数えられ、みんな小規模ながら農協、郵便局、交番、小学校、保育園などの公共施設を始め、旅館や食堂、商店、パチンコ店、呉服屋、床屋・美容室、自転車屋、電気店、書店などがいずれも複数店あり、大山神社の境内では村祭りや、屋台など出店が繰り出す牛馬の競り市が年に数回開かれ、筆者らのチャンバラごっこの舞台でもあった。それもつかの間、高度経済成長の終焉とともに人口減少の波にはあらがえず、今ではひなびた寒村をあらわにしている。

一方、大山巖は〈明治時代の軍人。天保(てんぽう)13年10月10日生まれ。幼名は弥助(やすけ)。1862年(文久2)大坂に出て倒幕運動に参加。薩英戦争でイギリス艦の大砲の威力を認識し、戦後、江戸の江川塾で砲術を学ぶ。戊辰戦争に参加し、新陸軍下では、1870年(明治3)に欧州に派遣される。また、翌1871年11月から1874年10月までフランスに留学。西南戦争には別働第一旅団司令長官として出征。陸軍軍制のフランス式からドイツ式への移行期の1885年、初代陸軍大臣となる。1891年陸軍大将、枢密顧問官。日清戦争には第二軍司令官として出征。1898年元帥。日露戦争には満州軍総司令官となる。1907年(明治40)公爵。長州藩出身者が陸軍首脳部を占めていたなかで、陸軍の最重要官職に長期間就任できた理由として、茫洋とした人柄や藩閥的偏狭性の希薄さが指摘されている〉(「日本大百科全書」の解説より)

薩長と会津の犬猿は有名だが、大山巖も戊辰戦争では薩摩藩二番砲兵隊長として鶴ヶ城攻撃に従軍、そのとき鶴ヶ城に山本八重らとともに籠城していた山川捨松を後妻として迎えているほか、〈西南戦争をはじめ、相次ぐ土族反乱を鎮圧した。西南戦争では政府軍の指揮官(攻城砲隊司令官)として、城山に立て籠もった親戚筋の西郷隆盛を相手に戦ったが、大山はこのことを生涯気にして、二度と鹿児島に帰る事はなかった。ただし西郷家とは生涯にわたって親しく、特に西郷従道(隆盛の弟、筆者注)とは親戚以上の盟友関係にあった〉(ウィキペディア「大山巖」より)などの因縁を持つ。

ちなみに、山川捨松とは病死した先妻の岳父に紹介され縁を結んだもので、一線を退いてからは栃木県那須の別邸で農業を営みながら生涯を終えた。また、第二次世界大戦直後、多くの軍人の銅像が撤去される中、大山巖の銅像だけは撤去を免れたが、日本を統治したマッカーサー元帥が自室に大山巖の肖像画を飾っていたほどの大山ファンだったからという話もある。いわゆる敵方にも一目置かれる大山の人柄がにじむエピソードといえる。

さて、大山神社である。改築された社殿横に大山区と大山郷土研究会の手による「大山神社の由来」説明板がある。まず、以下は全文である。

この神社は、大山の人々の「長寿・幸い」を祈願するとともに、積極的な「地域づくり」をも祈願する大事な社(やし)です。

その歴史は、鹿屋市(かのやし)大始良(おおあいら)にある西俣(にしまた)城(じょう)に始まります。この城は戦国時代、島津家の家臣団の一人・佐々木氏が護っていましたが、激しく対立していた肝付(きもつき)氏(し)の猛攻にあい、落城してしまいました。結果、薩摩半島への敗走が始まりました。佐々木氏主従は、まず浜児ヶ水(はまぢよがみず)に船で上陸。そののち大山の端・松風の吹き渡る城ヶ崎(ぞがさつ)に落ち着き、やがて発展性のある大山に定住しました。

佐々木氏を頂点とする家臣団は、大山の先住民たちとよく協力して、地域の開拓に営々と努力を積みかさねてきました。その数十年後、家臣団の心のよりどころとして「佐々木神社」を創建しました。佐々木家の「氏神」としての創建ですが、歴戦で亡くなった多くの先祖を弔い、さらなる発展を祈願する意味があったのでしょうか。

この氏神は、やがて佐々木氏が「大山氏」と名称変更するに及び、「大山(うやま)神社(じんじゃ)」と称されるようになりました。大山の地に住むすべての人々を祭る神社になったのです。このころにはまた、隣接地に学問寺の「正護寺(しょうごじ)」を創建しました。山川湊の正龍寺(しょうりゅうじ)の末寺としての位置づけですが、この神社と寺院で、大山の文化は一段と向上したといわれています。

佐々木(大山)氏は、その後、伴(ばん)姓(せい)頼娃(えい)氏(し)に仕え、開聞上(かいもんかみ)仙田(せんた)に移住しました。頼娃氏が加世田の島津日新公に仕えるようになると、加世田へと移住。さらに、日新公の子どもたちが鹿児島島の島津本家を継承するや、鹿児島城下に移住しました。この家系から、やがて元帥・大山巖が誕生しました。

大山家の子孫は現在、この地には残っていません。しかし、大山の人々は永年、この神社を自分たちにとってかけがえのない神社として大切にしてきました。ここの境内で六月(ろくがつ)灯(とう)などの伝統行事が続けられてきたのも、こうした経緯があったればこそです。今後とも、住民すべてで、その前向きな「大山魂」を引きついでいきたいものです。

なお、戦前までは、東京の大山家で代替わりがあると、新しい当主が大山神社に参拝して報告を行うものだったといわれています。

大山神社近くには、旧佐々木神社の王座跡、大山巖の次男・柏(かしわ)の渡欧記念碑「大山柏閣下渡欧」、日露戦争下で大山巖の満州軍総参謀長を務めた児玉源太郎を祀る児玉神社(山口県周南市)の氏子から寄贈された「台湾五葉松」など、巖ゆかりの碑なども建てられている。

大山巖が戊辰戦争を戦ったのは26歳、また西南戦争に突き進む西郷隆盛を思いとどませようと説得に赴いたのが32歳のときである。日清・日露戦争等で武勲をあげるも、西南戦争以降は一度も鹿児島島の地を踏むことはなかったが、1916(大正5)年12月に享年75で那須の別邸で死去する直前、意識朦朧の中で「兄さあ」とうわごとを言うと、妻捨松は「やっと西郷さんに会えたのね」と大山に話しかけたという。

郷里・鹿児島の大山出身者による県人会「関東大山会」の懇親会が毎年4月に開かれる。名簿登録者は84人で、年齢60代の筆者など若手の部類だが、関東に暮らす大山出身者は1000名を下らないという。一方、大山巖の那須の別邸は現在、「大山記念館洋館」と「大山農場」として残され、見学できるようになっている。ことしは明治150年。その明治にちなんで、ことしの4月は大山郷土研究会と関東大山会の有志で那須の施設を訪ね、墓前で社殿改築の報告を行い、幼年期から青年期を西郷とともに駆け抜けた大山巖公を偲ぶ予定である。



ネットブログ「日本最南端の駅！！今はJR最南端の駅に(笑)」より転載